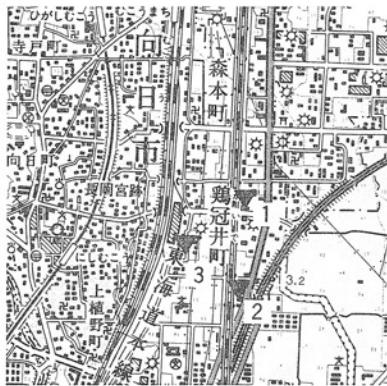


京都・長岡京跡(1)



(京都西南部)

- 1 所在地 京都府向日市鷄冠井町七反田・上植野町尻引・鷄
冠井町沢ノ東
- 2 調査期間 長岡京左京二条二坊十六町 一九八九年(平1)四
月～六月、左京三条三坊二町 一九八九年六月～
八月、左京二条二坊六町 一九九〇年一月
- 3 発掘機関 勝向日市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 國下多美樹・秋山浩三・中塚良
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 八世紀末
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八九年度に長岡京跡で木簡の出土した調査は四件あり(いずれも左京)、その調査主体は二機関にわたっている。本稿は、勝向日市埋蔵文化財センターが担当した三件の報告である。

一 左京二条二坊十六町(左京第二一八次調査7ANEHD-2地区)
調査地は、南一条大路と東二坊大路の交差点西南隅に位置する。東隣接地で実施した左京第一〇〇次調査では、南一条大路南側溝SD二一八〇一、東二坊大路西側溝SD二一八〇一の各道路関連遺構と左京二条二坊十六町内において柵列・溝・ピット群を検出した。以上の成果から、東二坊大路が約二四mの道路幅を有すること、交差点で東二坊大路の側溝を優先して通していること等の点が改めて明らかになった。

木簡は、南一条大路南側溝より一点、東二坊大路西側溝より二点が出土した。前者からは、長岡京期の土器類が少量出土したのみで、特筆できる遺物はない。一方、後者からは、長岡京期の瓦類・土器類を主体に、木製品・金属製品・土製品・動物遺存体・自然遺物・墨書き土器「家」「曹」等の各種の遺物が出土している。とりわけ、祭祀遺物がまとまって出土し注目される。

二 左京三条三坊二町(左京第二二一二次調査7ANEFSK-2地区)
調査地は、東二坊大路東端、左京三条三坊二町の北西部に位置する。長岡京の遺構は、東二坊大路東側溝SD二二一〇一、二町の西面築地SA二一一二六、その東雨落溝SD二二一〇三の他、町内の堀一條、掘立柱建物一棟、溝数条、土坑数基等を検出した。築地には一間の掘立柱の門SB二二一〇〇が設けられ、門西側の大路東側

溝には杭と側板で両岸を保護した橋S X一二二二五が架けられる。

門東側でも築地雨落溝の幅が狭められ、本来橋板が渡されていたと推測できる。大路から橋と門を経て入った町内では、諸遺構間に切り合い関係がみられ、二、三期の造営が考えられる。前半期では門の正面に南北方向の目隠し塀が設けられ、その南に南北棟の掘立柱建物が存在する。後半期には塀が取り壊され、門に通する幅約四・五mの東西路が取り付けられる。その南側では建物にかわって、間隔○・六~一・二mの南北小溝群(菜園畝溝か)が掘られる。後半期の遺構が廃棄された最終期にいたると、土坑が掘削される。これらは廃都時の塵芥処理用穴であるかもしれない。

右の遺構のうち、京内築地と門・町内路・目隠し塀・推定菜園地の検出が注目される。加えて、それらが少くとも一時期の変遷をとげることは、大路に面する町の利用状況を推しはかる重要な資料となる。また、門と町内路の中心線は町の北端から約三〇mを測り、町全体の南北四分の一に相当する。この位置で大路に門を開ける点は注目に値する。

遺物は、東二坊大路東側溝からやまとまつた量が得られた。木簡一点は同溝の橋南側で出土し、土器類・平瓦・丸瓦・鉄製車軸受・土馬・土鍤・墨書き面土器・転用硯が共伴する。橋北接部では溝最下部から、祭祀行為を示唆する斎串・人形・剣形・箸・横櫛・曲物等の木製品が集中して出土した。他に、包含層からは、墨書き土器

「器」が出土している。

三 左京二条二坊六町(第八九一三七次立会調査7 A N E K S 地区)

調査地は、六町の太政官厨家跡の西辺中央部に位置する。隣接する東側で実施した左京第二〇八次調査では、長岡京期の溝SD一二〇一一A・Bより七点の木簡が出土している(『木簡研究』一一号)。

今回は下水道工事に伴い、当地に左京第二〇八次調査検出遺構の延長部が予想されたため、当該部分についてのみ幅一~一・五m、長さ二~三m分の発掘調査を行った。調査の結果、溝SD一二〇一一A(前期)・B(後期)の延長部及び掘立柱建物SB一二〇八〇〇廂部分の東から二間目の柱穴二基を検出した。柱間は三・九mを測り、京城では最大規模を有する。

遺物は溝SD一二〇一一Bから、土師器・須恵器等の他に、木簡状木製品及び木簡一点が出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 左京二条二坊十六町

南一条大路南側溝

(1) □一二二口戸□上麻呂^(主カ)

□□西北□□□□

□東十升卅冊五十□

□□□

東二坊大路西側溝

92×12×4 081

「□□」

(3) • 「□□□」

• 「□□□」

(138) × (5.5) × 3 081

(1)は上・下端を折損する。やや厚めの材の表・裏に同筆で記す。文字は稚拙で、判読不可能な部分もある。作業現場等でのメモ・記録の類、あるいは手習いであろうか。(2)は完形の小型短冊型木簡。ごく薄く墨痕が残る。(3)は左辺が割れ、下端を折損する。表・裏両面、側面、上端木口面に太く直線や曲線が引かれている。このうち、文字は表面の一、二文字かと推測されるが、残存幅が五mm余とあまりに狭いため、木簡の性格は不明である。

二 左京三条二坊二町

(1) • □ □

• □□□

(119) × (11) × 5 081

三 左京一条二坊六町

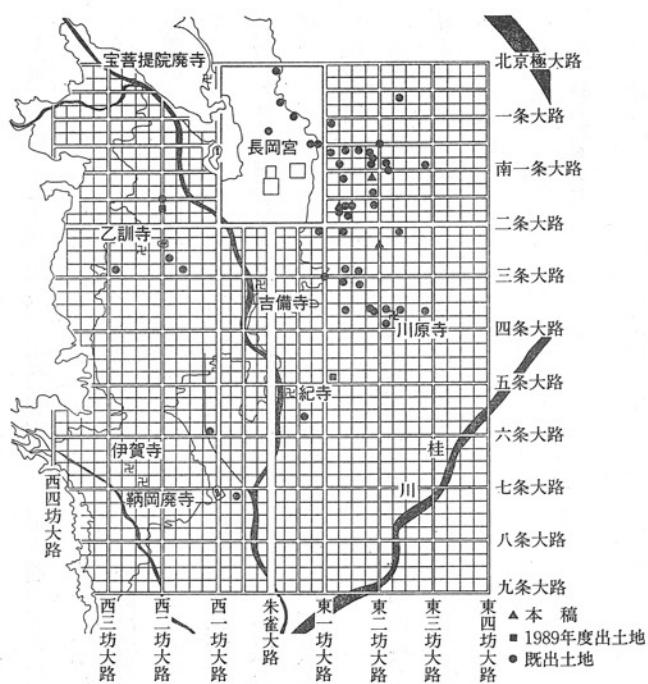
(1) • □□ □

• 日□□□□

(169) × (16) × 7.5 081

左辺が割れ、上端を一次的に削られた文書木簡の断片。

(一) 國下多美樹 二 秋山浩二
三 山中 章 稲文 清水みき



長岡京跡木簡出土地点図